

難訓辭典

中山泰昌編

難訓辭典

中山泰昌編



東京堂出版

難訓辞典 定價 三二〇円

昭和三十一年二月二〇日 初版発行
昭和五十九年二月一〇日 二九版発行

編者 中山泰昌

発行者 澄田讓

印刷所 文殊印刷有限公司

製本所 渡辺製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三ノ七(千二〇)
電話 東京 (三三三) 四一 振替 東京 千五

1581-131026-5164

©Yasumasa Nakayama 1956

S8805 / 14 (日 6-2 / 209)

难读词典

BG000600

まえがき

当用漢字の普及によって、漢字習得上の労苦は、いちじるしく軽減されましたが、しかし、これで以て漢字に対する一切の負担が、悉く除去されたと思うのは早計でありましょう。

われわれ今日の生活の根基となっている古来伝承の文化は、漢字と極めて密接な関係がありまして、その因縁は一朝一夕に断ち切ることは出来ません。しかるに当用漢字だけの知識では、手近な姓氏や地名も満足に読むことは出来ぬ始末でありますから、まして上古・中古の文献を探究するといったようなことは、非常な困難を伴うのほもとより、昔は、女・子供の読み物であった草双紙や浄瑠璃本、また明治・大正・昭和初期の小説すらも、完全に読むことは不可能でありましょう。元来漢字には、根本的に複雑な煩わしさがあればこそ、将来の学問や実務の世界への贈り物として、当用漢字が制定せられたのでありますが、それはどこまでも、今日以後に役立つ手形であって、過去の世界に對しての通貨とはならないのであります。

こうした事面倒な漢字の世界に、今一つ厄介千万な問題があります。それは、漢字固有の音・訓・義のいずれを頼りにしても、訓むことの出来ぬ言葉や物名が、当用漢字の中にさえ無数に有ることです。その中には、呉音・唐音・宋音、また延語・約語・略語・縁語・転訛・斎詞（いみこ

とば)等々で解説して見て、やっと合点のゆくものも多少はありますが、中には又、全然見当のつかぬ訓み方をするものが沢山あります。所がこれらは、訓み方が不明ですから、いきなり国語辞典に頼って引き出すことは出来ないし、漢字典に依るとしても、今の一般の漢字典の熟語中には、そうした類のものは殆ど挙げてありませんから、結局これらの言葉は、全く「辞典の捨児」であります。そこで此の捨児——「難訓」の言葉だけを拾い集めて、一つの辞典を作っておくことも、決して無用の業ではないと思ひまして、この一書を編成したのであります。

ただしこの難訓語のうち、「姓氏」と「地名」とは、切り放して一所にまとめた方が便利だと思ひまして、これを第二部として別個に集めました。また附録の「名数録」は、必ずしも難訓ではありませんが、その名数だけでは難解でありますし、これも一つにまとめて見ると、一種の節用的なものとなりまして、百科の知識を誘発する興味も多分にありますので、特に巻末に添えた次第であります。

昭和三十一年十二月五日

編 者

凡 例

この書に収録した言葉は、純然たる難訓語の外に
異音・唐音・宋音で訓まれるもの

古語・延語・約語・略語・縁語・雅語・素詞
漢・仏教語・転訛・俗訓・仮字・訳語・音訳
字その他漢名を和語に借用したもの

等々、すべて漢字の音・調のみでは読み下しがた
いものの外、一般に読みあやまり易いものをも広
くとり入れた。

第一部を「一般語」、第二部を「姓氏・地名」と
したのは、後者は説明を要しない、単純なもので
あるから、別個にまとめた方が見出しよいと思っ
たからである。

見出し語は圖数別とし、同圖数中では、同一文字
を一所にまとめて配列した。

地名には、県・国・郡名、山川・湖・沼名、また
古称・古地名等もある程度採り入れた。

姓氏・地名―殊に地名には、町・村名、小字等に、
珍名・奇名が無数にあると思う。この書には、そ
れらを収録しきれなかったが、他日、これのみで
大成したい念願もあるので、有る限りのものを委
しく御教示下さらば幸甚であります。

地名は果別だけにしたが、ここに掲げた以外の県
にも所在するものがあるかも知れないし、又、地
方的の訛りで、清音・濁音を誤っているもの、或
はその他の訛りちがい等があるかも知れず、お気
づきのものを併せて御教示願います。

附録の「名数録」は、名数順に配列した。この類
のものでは古く、貝原益軒の「和漢名数」・「説史
備要」中の「名数一覽」(二十三頁)があり、当然
相通じ、相似るべきものではあるが、前者の中に
は現代と縁遠きものが多いので、ほとんど採ると
ころが無く、また後者ののは、解釈不明のものが多
いので、本書に採録したものは、多少手がかりと
なる言葉を添えておいた。

漢字画数のかぞえ方について

当用漢字の新字体では、草冠・示偏・衣偏・疋・食偏などの画数のかぞえ方が違つて来たが、これらを非当用字のそれと區別して教えることは、漢字見出しの配列上紛雜を来たすおそれがあるので、左記の形のは、活字体の如何に拘わらず、当用字・非当用字を通じて、下方の画数によることとした。なお漢字の画数は、旧來でも迷いやすいものがあるから、それらも併せて、ここに掲げておくこととした。

【斗】（叫・収などの一部） 二画
 【𠂔】（糸・後などの一部） 三画
 【𠂔】（韋・降などの一部） 三画
 【𠂔】 三画
 【𠂔】 三画
 【𠂔】 三画
 【𠂔】 三画

【巨】	【巨】	【牙】	【无】	【比】	【止】	【才】	【正】	【良】	既・概などの一部	【良】	【臣】	【足】	【食】	【者】
【巨】	【巨】	（芽・邪などの一部）	（既・概などの一部）	（批・昆などの一部）	（此・雌などの一部）		（疏・疎などの一部）	【自】		（扁にある場合）	（姫・藏などの一部）	（路・露などの一部）	（扁にある場合）	（渚・都などの一部）
五画	五画	四画	四画	四画	四画	五画	五画	五画	五画	六画	六画	七画	八画	八画

難訓辭典

第一部（一般語）

一 画

- 一人 ひとり 人数のただひとつであること。いちにん。
- 一人 いちじん 天子の謙称。又、天子の尊称。
- 一人 いちのひと 摂政せいてい・関白かんぱくの異称。
- 一人 いちひと すぐれた人。一の者。
- 一人 ひとしお 〇染物を染汁にただ一回入れひたすこと。新六帖和歌集「しほぶてふただ一しほのすり衣、浅きものゆゑ何みだれけむ」〇転じて、一きわ。一層。一段。「一感を染うした」
- 一人 入染 ひとしおぞめ 染物を染汁に一回入れて染めること。又その物。
- 一人 チーハー 字花ともかく。中国人の間に行為れる一種の賭事。
- 一人 いちのかみ 古、左大臣の称。
- 一人 ちよと ちよと 鳥渡ともかく。ごく短い時間。しばし。少しの間。わずか。又、てがるに。たやすく。
- 一人 一寸物 いっすもの 一種物ともかく。

- 昔 各人が一種ずつの肴を持ちよって酒宴を催したこと。饗宴きやうえん「殿上のいっすものは常の事なれども」
- 一月 むつき 陰曆正月の異称。この他の異称をあぐれば、睦月むつき・つづき・つづ月・年端月ねはつき・太郎月・早蕨月はるわづき・暮新月くれしづき。又、諏月すつき・暢月ちやうつきなど。
- 一日 いちんち ひてい いちじつ 「いちんち」は「いちにち」の転。「ひてい」は「ひとひ」の転で、共に「終日」の意。「いちじつ」は「ある日・某日」の意に用いる。
- 一日 日花 とろろ とろろあおい 秋葵・黄蜀葵ともかく。「きょうふのり」(京海藻)の別名がある。錦葵きんぎ(ぜにあおい)科の多年生草本。中国の原産。肥大なる長根を有し、その粘液は紙漉の「ねり」に用いた。花は朝開いて夕にしぼむ。
- 一切 いっさい いっせつ 「いっさい」は、多くの物事を一まとめにして總称する語。すべて。悉く。どれもこれも。「一切切」又、「いっせつ」は、どんな事があっても。一向に。全然。一斤しん 一いっ こんぞめ べにの花一斤で絹一匹を薄紅にそめたもの。

- 一牛鳴地 いちごみょうち 仏典より出た言葉で、一頭の牛の声の聞えるほどの近い距離にある地。牛吼地。
- 一向 ひたすら 「ひたすら」(只管)に同じ。ただひとむきに。ただそれのみに。ひとすじに。
- 一季 ひとときおり 一季を期限として奉公すること。一季奉公ひとときこう。
- 一枝 一枝花 あきのきりんそう 秋麒麟草ともかく。藥科の多年生草本。方背やまな。
- 一品 いっぽん 諸親王の位階の第一。
- 一日 おとつゝい おととい 昨日(きのう)の前日。
- 一昨年 おとし 昨年の前年。前々年。去々年。
- 一昨日 さきおとつゝい さきおととい 昨日の前日。
- 一昨年 さきおとし さきおとし さいとどし 一昨年の前年。
- 一食頃 いちじききょう 仏家で、一度の食事をなす間。即ち短い時間。
- 一途 いちず 一図ともかく。一つの事に思いこんで心を傾けること。一徹。
- 一家 いちのいえ 摂政せいてい・関白かんぱくとなるべき家筋。
- 一夏 いちげ 仏教にて、陰曆四月十五

日より七月十五日までの九十日間をいう。この間は、僧侶は行脚(あんぎゃ)をしないで、安居(あんこ)して聴講、修徳する。「安居」の条参照。
 一板 いちこ ①無造作語(京都の方言)。②ばくちで、相手に割りのつかぬ内に大きな目が一遍に出たこと。

一張手 いっちゃやくしゅ 一磁手・一擦手・一塔手ともかく。(磁は開又は張の意。擦は手で物をはかる意。塔は仮字、仏像などの大いさを示す尺度。拇指と中指とを張った長さとも、二尺四寸、又は一尺二寸の長さともいう。)

一葉 はらん 葉蘭・蜘蛛抱蛋・紫蘭ともかく。百合(ゆり)科の多年生草本。別名、おおばらん。

一葉楓 ひとつばかえて 槭科の落葉喬木。いたごかえて・いたぎ・ひとつば・まるばかえて等の異名がある。

一塔手 いっちゃやくしゅ 「一張手」に同じ。その条参照。

一越 いちこち 次条の略。
 一越調 いちこちちよう 越調ともかく。古楽の十二調子の一。

一献 いっこん 一杯の酒。又、ござかもあり。一酌。小宴。
 一寝 ひとい ひとねむり。一睡。(古語)

寅之集 「慰めてひといたにねん月影に、山時鳥鳴きもゆかなん」

一節切 ひとよぎり 節一つ込めて切った造った尺八の一種。後世、小竹とと呼ばれる。

一擦手 いっちゃやくしゅ 「一張手」に同じ。その条参照。平家物語「一擦手半の弥陀の三尊」

一磁手 いっすもの 「一寸物」に同じ。その条参照。

一端撃 いちはながけ 戦争の時、第一番に敵陣にかけ入ること。一番駆け。

一磁手 いっちゃやくしゅ 「一張手」に同じ。その条参照。

乙鳥 つばめ 燕・玄鳥・烏衣ともかく。燕雀類の小鳥。春渡来して秋去る益鳥。よく害虫を捕食する。つばくら。つばくらめ。又、つばびらこ・つばい・えんじ・ひひこ等の別名もある。

乙御前 おとこぜ 弟御前ともかく。おたふく(御多福)の異名。

乙斯蘭土苔 イスランドこけ 依蘭苔(えらんたい・ええらんたい)ともいう。木状地衣類の一種。苦味甚だしく、胃腸薬に用い、アイスランドでは食事の際、牛乳に和してのみ、又、麦粉に交えてパンをつくる。

二画

二十 はたち ふたそじ 十の二倍。

二十山 はたちやま 富士山の異称。伊勢物語に「富士の山を見れば、その山は、ここに譬へば比叡の山を、二十(はたち)ばかりも重ねあたらん程して」とあるに本づいた称。

二十日 はつか ①一日の二十倍。二十昼夜。②毎月の第二十日に当る日。

二十日灸 はつかぎゅう 昔、正月二十日に、新年はじめての灸をすえたこと。又その灸。はつかやいと。

二十日薬膳 はつかだいこん 二十日はど位で食用となる大根の一品種。

二十葛 はたちかすら 担子菌類に属する菌類で、孤に寄生して病害を与える。まこもずみ・まこものすみ等の別名がある。

二日 ふつか ①一日の二倍。②月の第二日目。

二日灸 ふつかやいと ふつかぎゅう 陰暦二月二日に灸をすれば、万病に効

ありという言い伝えによる灸。

二月 きさらぎ 陰曆二月の異称。この他の異称をあぐれば、如月(きさらぎ・じよげつ)・衣更清月(きさらぎ・ゆきげつき)・小草生月(おぐさおうつき)・梅見月・帰仏(おさくらぎ)など。

七夕 たなばた 棚機ともかく。○次々条の略。○「棚機津女(たなばた)」の略。機を織る女。又、七夕に祭る星の名。○昔、七銭を賭物場とする隠語。

七夕月 たなばたつき 陰曆七月の異称。七夕祭 たなばたまつり 棚機祭・織女祭ともかく。陰曆七月七日の夕に、牽牛・織女の二星を祭って、兒女等が裁縫の上達を祈ったこと。

七寸 みずつき みずき 承控ともかく。○馬の轡の一部。手綱を結びつける所。ひきて。ひつて。○手綱の両端。

七月 ふみづき 陰曆七月の異称。この他の異称をあぐれば、文月(ふづき・ふみづき)・愛逢月(めであいづき)・女郎花月(おみなえしづき)・七夕月(たなばたつき)・棚機月(たなばたつき)・ささはなき月など。

七五三飾 しめかざり 注連飾・標飾ともかく。正月などに標飾を門戸又は神前にかけて飾ること。

七五三纏 しめなわ しりくめなわ 内外の境界の標。として引き渡す薬の纏。又新年の飾物として門戸に張る。

七里結界 しちりけつばい しちりけつかい(七里結界)の転訛。本義は仏教で、七里四方を結界すること。これが転じて、嫌いなものを寄せつけぬこと。しちりけんばい。津国女太夫「諺言申す人は七里けんばい」

七皇子 むかごにんじん 零余子人參ともかく。繖形科の多年生草本。葉腋に零余子(むかご)の如き肉芽を生じ、根は外形、人參に似る。

七星蛋 チーシンタン 中華料理の一。家鴨(あひる)の卵を粘土三分・食塩六分・硝石一分を混じこねた中に一週間つけおいたもの。塩蛋。

七星瓢虫 ななほしてんとうむし 七星天道虫ともかく。赤褐色に、七個の黒い点紋ある鞘翅類の虫。

七葉樹 とち とちのき 櫟・栎・栲ともかく。七葉樹(とちのき)科の喬木。葉は掌状複葉で七小葉より成る。七葉樹科 とちのきか 植物学で、顕花植物被子類双子葉門に属する離弁花区の一科。喬木、又は灌木。わが国には七葉樹の一種を産するだけである。

七種瓜 ななくさづめ 七種粥に入れた残りの醬母を茶碗の中の水に漬け、爪をこれに浸して切ること。昔江戸で行われた。

八入 やしお ○幾度も染汁にひたして染めること。○槭樹(かえで)の一品種。春、嫩葉が紅で、秋、緑色となる。○つじの一品種。野州つじ。

八十 やそ やそじ ○十の八倍。はち十。○多くの数。○八十歳。

八十四 やそかわ 幾筋にもわかれて流れる川。

八十山 やそやま 多くの山。順季集「ほととぎす八十山までに尋ね来て、ただひと声は聞くべきものか」

八十万 やそよろず 極めて多き数。やおよろず(八百万)に同じ。

八十万神 やそよろずのかみ 多くの神。一やおよろずのかみ(八百万神)に同じ。

八十平瓮 やそひらか 沢山の平瓮(ひらか)。○古語「平瓮」は「ひらいたかわらけ」で、神代に用いたものを「天の平瓮」といった。

八十石階 やそのいわばし 播磨国印南郡東神吉村にある古蹟。昔、陰陽二神及び八十二神降臨の地と傳せられると

ころ。一山の石、おのずから階段をなし、その数八十あるという。夫木和歌集「雪降れば天の羽衣白たへに、風さへ渡る八十の石橋也」

八十鳥 やそしま 多くの鳥。

八十桐 やそか「八十桐」に同じ。その条参照。

八十梟神 やそたける 多くの賊徒の主魁。多くの梟神(たける)。

八十限 やそくま 多くの限。もも(百)の境。(古語)万葉集「この道の八十限」とによりつたび、かへりみすれど、いやとはに、里はさかりぬ」

八十限手 やそくまで (て) (手) は、(路)の転。八十限を経て行く道。遠隔の地。

八十路 やそじ 八十ともかく。年齢の数が八十であること。八十歳。

八十桐 やそか 八十桐ともかく。多くの桐。(古語)万葉集「難波津にみ船おろすあやそか貫ぬき、今はこぎぬと妹に告げこそ」

八十諸神 やそよるずのかみ 「八十万神」に同じ。その条参照。

八月 はづき 陰暦八月の異称。この他の異称をあぐれば、葉月、月見月、踏越月、草津月、燕去月。

紅染月、など。

八方 やも 八面・八維ともかく。天地。左右・前後の四方八方。やおも。

八少女 やおとめ 神社に仕え、神楽(かぐら)など奏する八人の少女。

八手風呂敷網 はちだふるしきあみ 八田風呂敷網・八駄風呂敷網ともかく。浮子と沈子がなない四艘張網の一種。主に鯨・鰯などを捕えるに用いる。

八尺鳥 やさかどり 八尺(やさか)の嘆きをする鳥の意で、その義から「いきづく(息づく)」にかけていう枕詞とする。万葉集「沖に棲すもを鶴の如(も)ころ」八尺鳥、いきづく妹を置きて来ぬかも」

八尺環曲玉 やさかにのまがたま 三種の神器の一。(やさか)は「弥栄」の義という説もある。

八手網 はちだあみ 八田網・八駄網ともかく。全部麻糸または絹糸で造り、浮子(あば)と沈子(いわ)とを具えた方形の敷網。多く九州地方などで用いる。

八仙花 あじさい 紫陽草・紫陽花・瑪理花・天麻裏ともかく。虎耳草(ゆき)のした科の落葉灌木。あずさい・かたしろぐさ・しちへんげ等の別名もある。

八百万 やおよるず 数の極めて多いこと。ちよろず。(古語)

八百万神 やおよるずのかみ 多くの神神。あらゆる神々。八十万神。

八百土音 やおによし 八百丹吉ともかく。「きづき(杵築)」にかける枕詞。

八百丹吉 やおによし 前条に同じ。

八百稲 やおしね 極めて多くの稲。

八角金盤 やつて 八手・金剛裏ともかく。五加(うこぎ)科の常緑灌木。葉は掌状に分裂、花は有蒂。はぼろ・てんぐのはうちわ等の別名がある。

八角鷹 はちくま はちくまだか 蜂熊ともかく。蜂及びその幼虫を捕食する猛禽類の鳥。

八坂方 やさかた 城玄・屋坂方・屋佐方ともかく。琵琶法師の一派の称。他の一派「都方」に対するもの。(九画の部「城玄」の条参照)

八房梅 さろんめ 中つぶさうめ 座輪梅・重葉梅ともかく。梅の一品種。雌蕊が二本乃至八本あって、その一花に数箇の実を結ぶもの。ざろん。

八面 やも「八方」に同じ。その条参照。

八重生 やえなり 緑豆ともかく。小豆(あづき)の変種。青小豆ともいう。

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八咫鏡 やたのかがみ やあたのかがみ

八尺鏡ともかく。三種の神器の一。

八拳 やつか 八束ともかく。長びのながいこと。「―猿」

八峰 やつお 多くの山。万葉集「奥山の八峰（やつお）の峰つばらかに、今日は暮らさね丈夫（ますらお）の徒と」

八鳥 ははつちやう 馴馴鳥ともかく。伯勞（もす）に似て、とさかがある。能く他鳥の声を真似る。ははとり。

八條 むさし 次条に同じ。

八道 むさし 八格戯・六指ともかく。○盤上に線を劃し、六箇の石で線上を一画ずつ辿り、勝負を争う遊具。六六指。十六格。六指・八道行成（やさすがり）などの種類がある。○子供が地上に大路小路の形を描き、銭を投げて勝負を争う戯。じゅうろく・やこうじ・ろくどうちろく道等の称がある。

八道行成 やさすがり やさかり 碁子を動かして勝負を争う遊戯。八道（むさし）の類。（前条第一項参照）

八指 やつか 「八拳」に同じ。その条参照。

八節 やふ 八封ともかく。結び目・編み目の多くあること。

八極 やも 「八方」に同じ。その条参照。

九十 このそじ 「じ」は接尾語 九

十歳の年齢。

九十九髪 つくもがみ 江浦草髪ともかく。老女の白髪をいう。そのさま「江浦草（つくも）」に似ているからともいい、一説には、「つくも」は「つづも」の誤りで、物の足らぬことを「つづ」と言い、「白は「百」より一画足らぬ故、百より一足らぬ「九十九」をこれにかけた語だともいふ。伊勢物語「百とせに―とせ足らぬつくも髪、われを恋ふらし面影に見ゆ」

九月 ながつき 陰暦九月の異称。この他の異称をあぐれば、長月・菊見月・紅葉月（もみじつき・濃葉月）・木葉月・小田刈月・紅梅月・太閤月・無射月など。

九生 如來 くしようにらい 大日如來または阿弥陀如來の異称。

九金 くえ 真言宗にいう九番の法会。

九折 つづらおり （葛・蕨などの蔓のようにうねった意。）○坂路があちこちに曲りくねっていること。又その坂路。羊腸。○馬術で、馬が左又は右に横歩みするとき、馬の心のままにさせて逆らわぬこと。

九品 くぼん 仏の位に達するまでの階級を、上生・中生・下生の三品とし、

それを更に上・中・下に分けて九等の階級とすること。

九品仏 くぼんぶつ 九品（前条参照）の階級のほとけ。

九重 このえ ①禁中。大内。（古、中国の王城は門を九重に造る制であって九重とも九門とも云うより出た語）

②物の九つ重なること。

十 そと。じゅう。「三十年・三十一文字・八十・幾をばく」

十 と「とお（十）」の約。「十巻（とまき）二十巻（はたまき）」

十一月 しもつき 陰暦十一月の異称。この他の異称をあぐれば、霜月・霜降月・神楽月（かぐらつき）・雪待月・雪見月など。

十二月 しわす 陰暦十二月の異称。この他の異称をあぐれば、師走月（しわすつき・四極（しわす）・極月（しわす）・極月・年満月・雪月・年世積月・暮古月（くれこつき）・臘月など。（四極・極月）の「しはす」は「しはつ」の転で「年はつ」の義。）

十二簀 きれんじやく 黄連雀ともかく。連雀の一種。羽毛の黄色なるもの。

十千万貫 とちまんがん 巨万の金額。

十大功勞 ひいらぎなんてん 松南天と

もかく。南天に似た小槩（めぎ）科の常緑灌木。からなんてん・ひらぎなんてん等の別名がある。

十寸鏡 ますがみ 真寸鏡・真澄鏡ともかく。よく澄みて明かな鏡。

十月 かみなづき 陰暦十月の異称。この他の異称をあぐれば、神無月（かみなづき）・神有月（かみありづき）・時雨月（しぐれづき）など。この月、出雲に全国の神が集まるといので、一般には「神無月」と称し、出雲においては「神有月」というと。

十六豆 じゅうろくささげ 豆の一種。莢極めて長く、一莢に十五六もあるよりいう。十八豆ともいう。

十六夜 いさよい いさよい 陰暦、月の十六日。又その夜。既望。

十六島海苔 うつぶるいのり あまのりの一種。出雲国十六島（うつぶるいのり）の沿岸に産するのでこの名がある。

十代 そしろ 上古、田地の面積を計った単位。①一しろの十倍の地積。大宝令以前の五十歩の積。令制の七十三歩に相当する。②田地のせまい面積。

十代田 そしろだ 十代（ほ）どの田。せまい田地。（古語）

十呂盤 そろばん 十露盤・算盤ともか

く。計算に用いる具。算馬。

十姉妹 じゅうしまつ ①燕雀類の鳥。四十雀に似て小さい。「じゅうしまい」は「菩薩いばら」の別称。

十拳剣 とつかつるぎ 身の長さ十つかはある剣。（古語）

十露盤 そろばん 「十呂盤」に同じ。その条参照。

人勾引 ひとかどい 人をかどわかすこと。またそれを職業のようにした者。

ひとあきない・ひとかい等ともいう。

人主 ひとしゅう 人の主たる人。（古語）

群言「人しゅうには成りたいものでござる」

人兄 ひとこのかみ 群の人の長。（古語）

魁師。首長。人來鳥 ひとくどり 「鷲」の異称。（古語）

俗曲、花柳台詞謡曲「新玉の春ぞと告げて人來鳥」

人參 にんじん 人蔘・人蔘ともかく。根の形が人の五体に似たるより出た文字で、もと薬用の「朝鮮人蔘」にのみいったのであるが、後に蔬菜の「にんじん（胡蘿蔔）」にも通じ用いるに至った。五加（ごか）科の多年生草本。

形状すべて野人蔘「のにんじん」に似る。古来、高貴の薬用とし、朝鮮開城

の産が最も有名である。高麗人蔘・朝鮮人蔘・かのにけぐさ等の別称がある。俚語「呑んで首くぐる」

人面竹 ほていちく 布袋竹ともかく。幹は釣竿・杖・傘の柄などとし、筍は食用となる。ぶんめんちく・りゅうきゅうちく等の別名がある。

人給 ひとだまい 人々に物を給うこと。またその物。また随行者の乗る車。

人蔘 にんじん 「人蔘」に同じ。その条参照。

人蔘 にんじん 「人蔘」に同じ。その条参照。

人戯 ひとそばえ 他人の前で調子に乗って戯れさわぐこと。

人騒 ひとぞめき 人が混雑してやかましいこと。

人頼 ひとかたい 精神上の不具者。（古語）

源平盛衰記「人と生まれて、仁義を顧みず、恥を知らざる者をば、人頼といふ」

入内 じゅたい 女御又は皇后が、儀式を具えて内裏に参られること。

入内雀 にゅうないすずめ 黄雀ともかく。形、普通の雀より稍小さい鳴禽類の小鳥。人家近くには棲まない。別名、にゅうない。

入水 じゅすい にゅうすい 水に投じて死ぬること。

入母屋造 いりもやづくり 「入母屋」は屋根の上の方は切妻、下の方は寄棟造のように勾配のついたもの。この様式で建てられた屋根のものが「入母屋造」で、これを「破風造」ともいう。

入来 じゅらい 来り訪うことの敬語。御いで。光来。

入音声 いりおんじょう 舞臺で、舞人が舞いながら退場するときに奏する音楽。

入洛 じゅらく 貴人が都に入ること。特に京都に入ることという。

入紅葉 いりもみぢ 極めて色の濃いもみぢの古語。奥竹集「いりもみぢ。ひとしほ色の濃きもみぢなり」

入御 じゅぎょ 天子が宮中に入らせられること。又、内裏に還り入らせられること。

入部 いるとものお 御子代給の民・御名代給の民を部領する長。(古語) 上古 天皇・皇后又は皇族の御名を後代に伝える為、その御名又は御居所の名を負わせて皇室の付属とし、供御その他の費用の資とせられた部民を

「御名代給」と称した。これは記録の備わらなかつた時代の制度で、もし天皇・皇室の嗣がなかつた時は、御名代給その御名を記念したので、かかる場合はこれを「御子代」ともいった。大化の改新で私有の部民を止められたため、この制も廃止せられた。

入黒子 いれぼくろ 情人の名などを腕などに小さく入れ墨したもの。

入棺 にかん 「入棺(にゅうかん)」に同じ。死体を棺に納めること。(古語)

入間様 いるまよう 入間詞話というも同じ。意味を反対に、又は順序を顛倒して言う詞。武蔵の入間川は、水が逆流するのでこの言葉が出来たという説がある。古句に「夏の日を涼しといふや入間やう」

入魂 じゅこん じゅつこん じゅこん 惡意。親密。惡親。

入縁 いりえん いりえ 〇「いりえん」は、元祿時代の用語で「先方から申込みの縁談」の義。若風集「歴々のいりえんなれども、かつて取合わず」〇「いりえ」は、もと「いりへ」で、「へ」は「いへ(家)」の略、入家即ち「入婿」のことをいう。卯月の紅蓮「総じていりへ・いり婿に小言さのあるは習ひ

なれど」

丁 よはろ(國名の転義)。古、公用の職役につく二十一歳から六十歳までの男の称。

丁 丁 ちんちん 〇拍子木をつづけうつ音。〇芝居の幕切れに、拍子木を鳴らすより転じて、物事の終りをあらわすにいう。(伐木丁々)は、バツボクトウトウと読む。木を伐る音の形容で、この場合「チウチウ」とはよまない。

丁子 ちょうじ 丁香ともかく。桃金娘(てんにんか)科の常緑喬木。熱帯の産。花は香氣極めて高く、香料又は薬用に供する。

丁香 ちょうじ 「前条」に同じ。

丁香花 ちょうじはりあさが 針朝顔・天茄児ともかく。旋花(ひるが)科の蔓性一年生草本。嫩葉は食用となる。別名、とうあさが。

丁 丁 ちんちん 通草・木通・山女・蜀子・蜀葵・烏蘆・紅姑娘などとかく。通草(あけび)科の蔓性落葉灌木。あけびからあきび・あくび・あさうち・あさうつ・かみかざら等のよみ方がある。

丁 丁 ちんちん 酒精溶液の総称。「ヨジム——カンフル——」

丁 鬘 あんまけ 昔の男の髪の結い方の名。「あたまた」
刀心 こみ 小身・忍・込ともかく。刀剣の中子等。

刀目 とじ ①主婦。女主。婦人。万葉集「からたちのいばら刈りそけ有建てむ、鬘遠くまれ櫛造るとじ」②他人に仕えて家事を司る婦人。③中世朝廷の御厨子所・社・合殿所・内侍所等、又、攝家、又、武家時代にも管中であつて、雑務を務めた女房。「刀目を」とし」と読めば、多少意義を異にする。次条参照。

刀目 とうじ ①前条に同じ。②酒造家にあつて酒をかもす人の長。中国周代に杜氏(杜康)が酒を醸したのに本づいた名だとも。古、造酒司・酒壺神に、大呂刀目(おとおとめ)とし。小呂刀目(おととめ)とし。があり、又その酒壺に、大とし・小としの名があるのに本づくともいう。

刀豆 なたまめ 蛇豆ともかく。荳科の一年生蔓草。朱熟の莢は漬物とする。

刀背 みね ぬね はひね 刀剣の刃の背がわ。
刀背打 みねうち ぬねうち ①峯打ともかく。刀の背の方で打つこと。②齒

のなない人が歯茎で堅い物を食うこと。
刀嚙 とね ①古、主典以上の階官。②古、公事にあずかる程の村長・里長。郷土のようなものを、その下役から呼ぶ称。③昔、伊勢・賀茂等に置かれた神職の一。

刀綱等 とねあらをい 力くらべ・腕押などの類。(古語)
刀鎌 かななかし 刀剣をきたえ造る人。うちものし。
刀嚙 こぶも 小鴨ともかく。鴨の一種。
乃米 のうまい 飽米ともかく。年貢米のこと。

乃桑 なら 大和の「奈良」にあて用いられた字で、「平城・寧桑・奈良・平」も同じである。元明天皇以下、七代、七十余年間の帝都。
又従兄弟 またいとこ 再従兄弟ともかく。双方の親が従兄弟(いとこ)同士である人同士の関係をあらわす称。
「又従兄弟」の子同士「三従兄弟」も単に「またいとこ」と呼んでいる。ふたいとこ。

ト郎 うらべ 古、太占(ふとまに)のト事によつて、神事に奉仕した氏族。了風草 いわがねそう 岩根草・蛇眼草ともかく。水竜骨(あおねかずら)科

の多年生草本。おおしだ・がんそくしだ・かなびきそう・やまどりそう等の別名がある。



三一 竜んびん 双犬(すごろく)などで、采の目に三と一とが出ること。
三一 奴 さんびんやつこ 次条に同じ。

三一 侍 さんびんさむらい (昔、一年に僅かに三回と一人扶持とを受けるの義から)身分の軽い侍・若衆などを尊しめいった語。三一 野郎・三石さんともいった。
三十 みそ みそじ (「じ」は接尾語。三十路ともかく。) 十の三倍。さんじゅう。

三十一 字 みそひともし 和歌が三十一文字より成るので、和歌のことをいう。
三十三才 みそささい 鰯・鰯鰯・鰯三歳・巧婦鳥ともかく。燕雀類の鳥。形、雀に似て極めて小さい。山地に繁殖し、冬季は平原に出で、巢は樹洞・家屋の暗いすきまなどに造り、その構

造巧妙である。ささぎ・こどり・かぶとちよう・みそつどり・みそねすみ・たくみどり・みそくくり・みそつく等の別称がある。

三十日 みそか 晦・晦日ともかく。陰暦では、月の末頃は、月光が欠けて無くなるより「つきごもり」略して「つきごもり」といい、転じて、月の最終日の称となり、又、一箇月は平均三十日である所から、「み(三)そ(十)か(日)」の語が、月の末日の称となるに至ったが、後には陽暦の方でも、月末を「みそか」と呼ぶようになった。

三千年草 みちとせぐさ 桃の異称。

三寸 みき 神酒・御酒ともかく。神祇に供える酒。おみき。

三三九 きんざく 三尺ともかく。鎌倉・室町時代に行われた一種の騎射。「九半」に同じとも。三的の類であらうともいうが、詳らかでない。三三九「三」の之後、三三九・四六三以下、作物等各射の「三」。

三月 やよい「弥生」の略。陰暦三月の異称。この他の異称をあぐれば、弥生(やよい)・弥生月・早花咲月(さばなさきつき)・さばなさ月・夢見月・歳月(としづき)・歳月(はらえつき)・しめい

ろ月・蚤月など。

三尺 きんざき ①中国にて、「法律・おきて」のことという。昔、中国では、三尺の竹簡に法律を記したことから出た語。②刀・剣などという。漢書の高帝紀に「吾、布衣を以て、三尺を掲げて天下を取る」とあるより出た語。

三五月 もあづき 望月ともかく。陰暦十五夜の日。(三五十五の洒落)

三木張 さきちよう 「三稜打」に同じ。その条参照。

三日間 みかぐり 古、奥羽地方で、国司着任の際、三日の間、管内の主だった人に饗応したこと。

三世 きんざ 仏教で、過去世・現世・来世の三つの世界。「一」の諸仏。

三平二満 おたふく 阿多福ともかくが、「阿多福」には「多福」を表現した第一の意味と、女を罵っている第二の意味とがあり、「三平二満」は後者の異称で、おかめ・おたやん・おでこ・おとこ等の異称もある。

三白草 かたしろぐさ はんげしろう 三葉白草ともかく。「半夏生」に同じ。三白草(はんげしろう)科の多年生草本。水辺に自生し、夏、淡黄色の花をひらく。

三白草科 はんげしろうか かたしろぐさ 植物学で、顕花植物双子葉門の離弁花区に属する一科。この科には三風四種の植物を含むが、内、わが国に産するものは二種であるという。

三代格 きんざいきやく 弘仁格・貞観格・延喜格の総称。

三代格式 きんざいきやくしき 弘仁格式・貞観格式・延喜格式の総称。

三有 きんぬ (三の韻に引かれて「う」は「ぬ」と発音する。) ①仏教で三界の生死、即ち欲有・色有・無色有の総称。②本有・当有・中有の総称。

三衣 きんぬ (め) は三の字の韻に引かれてよむもの。仏教で、三種の袈裟、即ち大衣・中衣・中着衣の総称。

三金 きんぬ (金は三の韻に引かれて「ね」と発音する。) 仏教で、三度の法会。

三宅 きんぬ 三家・屯倉・屯家・官家ともかく。古、皇室の御料地たる屯田(みた)のある地に設けた米倉。

三行半 きんぬ 三行半にかく慣わしとも、離縁状の称。三行半にかく慣わしとも、結婚の時の証文が七行で、離縁の時、これを二つに引裂くからだともいう。